

「壁ノ花団」

登場人物

女1

女2

女3

女4

第一場

古い一軒家。夜、下手から明かりが漏れている。部屋があるようだ。

外から大変強い雨の音が聞こえる。

やがて上手奥より人がゆっくり歩くような音がする。突然どたつと大きな音がする。

再び静寂。

下手のドアが勢いよく開く。女2、女3が飛び出してくる。

女2は懐中電灯を、女3はよくわからないものを持っている。

女2 だーっ。

女3 だーっだーっ。

女2 泥棒か？泥棒か？

女3 殺す殺すぶっ殺す。

女2 泥棒かこらあ？警察じゃあこら。

女3 殺す殺す。

女2 警察呼ぶぞこらあ。

再び静寂。

女2 ん？

女3 あれ？

女2 誰かいますか？

女3　もしもし？

女2　いないよ。

女3　うん。

女2　うんじゃないよ。

女3　おかしいな、絶対へんな音したんだって。

女2　気のせいじゃないの？

女3　隠れてるのかも…。

女2、3、ゆっくり上手の様子を見に行く。

女2、3、おのおの何かに気づく。

女2　ぎゃ。

女3　ぎゃ。

女2、3おのおの飛びのく。

女3　なに？

女2　そっちはなに？

女3　こっちはなんだろう？

女3　(何かを拾い) あ、桂馬だ。

女2　岡部さん？

女3　え？

女2懐中電灯で何かを照らす。濡れた雨合羽を着た女が横たわっているのが見える。

女2　岡部さん岡部さん。すごい怪我してる。岡部さん、岡部さん。

女3　え？(近づき、確認する) 岡部さん。これなに？血？

女2　岡部さん。どうしたんですか？

女3　どうしよ？血でてる。頭から血出てる。

女2　岡部さん。岡部さん。ちよつと岡部さん。

女3　やばいやばいやばい。

女2　え、え、どうしよ？ちよつと、岡部さん。

女3　しっかりしてください岡部さん。…岡部さん。

女2　岡部さん岡部さん。

女3　岡部さん、大丈夫ですか岡部さん。

女1、反応せず。

女2 運ぼ。

女3 え？

女2 運ぼ、どっかにさ。

女3 どこ？

女2 どっかによ。どっか明るいところによ。だって暗いじゃん。あ、あそこに。

女3 え？あたしの部屋？

女2 いやなん？

女3 いやいやいや全然。

女2 だって遠いじゃん岡部さんの部屋。

女3 いやいやだから全然。

女2 持った？ちゃんと持った？

女3 うん。

女2 頭下げてよ。

女3 ほい。

女2 あー、ちがうちがう、頭上げてよ。

女3 ほい。

女2 あれ、どっちだ？下げか？ん…？いやいやいや下げたらだめだめ。

女3 ほいほい。

女2 いくよ。

女3 ほいほい。

女2 女3 それぞれ上半身と下半身をもって女1を持ち上げようとする。

女2 3 んーっ。

女2 そうだ、柴田さん。呼ぼ。

女3 あー、そうそう。呼んで呼んで。

女2 うん。

女2、二階に上がっていく。

女3 大丈夫ですか、岡部さん。…岡部さん。…なにがあったんですか…岡部さん…

しばらくして女3、女4を連れて階段を下りてくる。

女2 (女4に) あそこです。

女4 どれ？

女3 (懐中電灯をまわしながら) あ、ここです。

女4 なんて電気つけないの？

女23 おおう。

女3、電気をつける。

廊下がさきにつく。そして台所、続いて部屋。

正面に大きな机がある。周りに椅子。下手奥に二階へ続く階段がある。階段の横にたんすがひとつ。階段の前にはドアがある。上手前は台所へ通じ、上手奥は玄関に通じている。

濡れた雨合羽を着た女1(あきらかにもう生きてはいない)が倒れているのがわかる。

女4 岡部さん。岡部さん。

女2 とりあえず、電話してもらっていいですか？

女4 …。

女2 …柴田さん。

女4 え？

女2 あの、電話。あの、救急車。

女4 あ、はい。え？まだしてないの？

女2 はい。だって…。

女4、階段を上がっていく。

女3 大丈夫かな？岡部さん

女2 いやいや…大丈夫じゃないでしょ。どうしようか？

女3 うん。

女2 とりあえず運ぶ？

女3 うん。

女2、3、女1を運ぼうとする。

女2 結局ふたりかよ。

女3 せいの。

女2 おらっ。

やはり持ち上がらない。

女3 あ。

女3、自分の部屋へいったん去り、布団を持って登場。

女3 これで運ぼう。

女2 ああ、うん。

女2、女3、ふとんになんとか女1を乗せて持ち上げる。そのまま下手の部屋に入る。しばらくして女3がタオルを持って出てくる。そこに女4が降りてくる。

女4 電話した。(女1のいたほうを見て) あれ？

女3 あ、あたしの部屋に…。

女4 あ…そう…。

女3、台所へ消える。女4、下手に消える。

しばらくして水を張った洗面器とタオルを持って女3がでてくる。そのまま下手に消える。

女4でてくる。女1の倒れていた場所をぼんやり見ながら、思わず椅子にすわる。

女3でてくる。

女3 あの。

女4 …。

女3 …柴田さん。

女3 あの…。

女4 どう？

女2 …。

女4 そう。

女3 それで…、連絡したいんですけど…岡部さんの、ご家族とかに…。

女4 ああ。

女3 連絡先知ってますか？

女4 大丈夫よ。

女3 え？

女4 いないから。両親とか、いないから。岡部さん。
女3 ……そうですか。…誰かほかにいますか？連絡したほうがいいひと。
女4 わかんない。蛭名さんのほうが詳しいんじゃないの？
女3 はあ。あたしも、あんまり、わからないんです。

女3、下手に去る。

女4、立ち上がり、血のついた床を見ている。

しばらくして女2洗面器とタオルを持ってでてくる。タオルが赤く染まっている。洗面器の水も赤く染まっている。

女4 横山さん。

女2 はい。

女4 タオル貸して。

女2 (血のついた床を見て) あ、あたしやります。ちょっと水代えてきます。

女2、台所へ去る。そしてタオルだけ持って戻ってくる。

女2 あ、いいです。やります。

女4 ありがとう。

女4 よく歩いたね。

女2 え？

女4 ここまで。

女2 そうですね。すごい。

ふたりで血の軌跡を見る。

女4 しぶといなあ。なんか岡部さんらしい。

女2 そうですね。…事故したんですかね、やっぱり。

女4 ちょっと外見てくる。

女2 あ、はい。あの、すごい雨ですよ。

女4 知ってる。

女4、上手奥へ去る。女2、床を拭いている。女4、戻ってくる。

女4 すごい雨だよ。

女2 はあ。そうですか。
女4 うん。
女2 岡部さんのバイクありました？
女4 あ、そうだった。それ見にいったんだった。

女1 出てくる。厚着をしている。そのまま椅子に座る。

女4 ごめんなさい。も一回見てくる。

女2 あたしも行きます。

女1 (台所に)あのさあ。

女2 柴田さん、なんか上、着たほうがよくないですか？

女4 うん。

女4、そのまま手奥へ去る。女2、台所へタオルを置きに行き、戻って下手の部屋の前まで行く。

女1 遅えーよ。

女2 ちよつと、外見てくる。

女2、下手奥に去る。そして長靴をもって出てくる。そのまま手奥に去る。

救急車のサイレン近づいてくる。明かり変わって昼間。

第二場

救急車は通り過ぎて行ったようだ。女1、相変わらず座っている。

女1 まだーっ？ 蛭名あー。

女3 (袖から)ちよつと。岡部さん、これえ…。

女1 なに？

女3 (袖から)カップとか持ってってくださいよ。

女1 おうっ。

女1、台所に消える。机の上にミニ将棋版がおいてある。

しばらくのち、カップとクツキーの乗った皿をもって登場。

女1 あと、どんぐらい？
女3 (袖から) 一分えっと二十秒。
女1 おうっ。

女3、ティーポットを手に出てきて女1の隣に座る。女3は軽装。

女1 ふん(あごで将棋版を指す、以下はなんとなく将棋を指しながらの会話)

女3 あ…。

女1 …蒸らしたよ。…お蒸らしたよ。

女3 ちよつとやめてくださいよ。

女1 きょうは何？

女3 バナナです。

女1 ん？バナナ？紅茶にバナナ？なにそれ。おいしいの？

女3 多分。

女1 この前のジャムは？あれなの？

女3 ないです。

女1 あんた、一人でばかり飲んでんじゃないよ。

女3 違いますよ。あれで全部だったんですよ。

女1 ほんと？

女3 だってあれ、サンプルでもらったやつですもん。

女1 そうなの。

女3 バナナはいっぱい買いました。当分楽しめますよ。

女1 でも、バナナだろ？なんかさ、心躍らないよね。

女3 おいしいですって。おいしいっていつてももん。

女1 誰が？

女3 お店の人が。今日銀座の専門店に行ったんですよ。感動しましたよ。なんかね、すっごい広いフロアがあつてね、端から端まで全部紅茶なんですよ。同じ様な入れ物に入つてね、でも一個一個ちがうんですよ。ちがう名前が書いてあるんですよ。それがね、ぶわーつて並んであるんですよ。それが向こう側にも並んでるんですよ。ぶわーつて。感動しますよ。

女1 へえ。

女3 あれ？感動しないですか？

女1 あんたほどはな。

女3 で、その店員さんが勧めてくれたんですよ、これ。私は好きですけどって。

女1 信用したのそんなこと？

女3 え、だめ？

女1 だってさあ、まずくても知らないよって言うてるようなもんじゃないの。
女3 え、そうなんですか？

女1 だめだよ。ほんとにおまえはだめだめ社員だよ。掴まされたよ、不人気商品をよ。
女3 そんなことないですって。だって店員さんいい人だったし。

女1 いい人なんていないよ世の中に。
女3 ちよつとちよつと。

女1 悪人ばかりなんですよ。この東京砂漠。

女3 田舎者はこれだからいやだ。

女1 山梨より、まし。

女3 北海道より、まし。

女1 札幌は本物の都会、山梨の片田舎より、まし。

女3 や、山梨は…。かぁー(悔しがる)

女1 ふおつふおつふおつ勝った。

女3 …ねえねえ東京の人。

女1 なんだい田舎の人？

女3 暑くないですか？

女1 …いやいやいや。あんたこそ寒くないの？

女3 寒くないですよ。何月だと思ってるんですか東京の人？

女1 いやいやいや田舎の人。あんたこそ何月だと思ってるのよ？

女3 私が訊いてるんですけど。

女1 私も訊いている。だが答えはいつだって質問のなかにあるという。

女3 (時計を見て) あー、ちよつと。まずい。ちくしようにてめえ、べらべら喋ってんじやねーよ。蒸らしすぎたじゃねーかよ。もー。

女3、ティーポットを取り紅茶を注ぐ。

女1 ふん。ほんとだめな子だよ。

女3 くそうくそう。死ね岡部。(女1のカップに注ぐ)

女1 (女3の手際を見ながら) 来た来た来た来た。

女3 注ぎ終わる。女1、3 香りを嗅ぐ

女3 蒸らしすぎたしなあ、ちよつと濃いかも。

女1、女3、紅茶を飲む。

女1 あち。

女3 あ、いいじゃないですか。ほら。岡部さんどう？

女1 最高じゃー。

女3 味わって飲んでくださいよ。いいやつなんですから。

女1 味わってるってば。

女3 絶対味わってない。これあれなんですからね。

女1 なに？

女3 ……なんとかなんとかなんですからね。

女1 へえ。

女3、台所へ去る。本を持って戻ってくる。

女3 これこれ。ファーストフラッシュなんですからね。

女1 なにそれ？

女3 ふっふっふ。無知なやつめ。

女1 あんたね。

女3 ファーストフラッシュ。春摘みの新茶。爽やかで若々しい独特の風味。クッキーやケーキなどの洋菓子より、饅頭など和菓子に合う…と。

女1 なるほど。(クッキーを一枚取り)で、これがうわさの饅頭か。

女3 ええ。

女1 (食べる)和菓子独特の、このもちもちとした食感がなんとも。

女3 (クッキーを一枚取り)そうでしょうとも。

女1 (食べる)ほんと、紅茶と饅頭って合うよねえ。

女3 (食べる)ええ、おっしゃる意味はよくわかります。

女1 (紅茶を飲む)ナイスカップル賞だね。

女3 ええ。紅茶と饅頭ね。しつこいな。

女1 (食べる)この、じょうよ饅頭つちゅうのは値段だけのことはあるな。あんこの色が違う。

女3 ほう、そば饅頭まであるやないか。

女3 (食べる)なんだろうそれは？うろ覚えの落語だろうか？

女1 おつ、これはへそ饅頭やなあ。上等なもんばかり買ってきて。

女3 よくもまあいつまでもいやみが言えるものだ。濃いお茶がいっぱい怖い。ででん。あり

女3 ますよ濃いお茶。

女1 しぶといな。謝るならいまのうちだよ。

女3 なんでよ。なんで謝らなきゃならないのよ。

女1 自分の胸に聞け。
女3 買ってきてくださいよ、そんなに言うんだったら。
女1 それは断固ノー。
女3 絶対殺す。
女1 絶対殺されません。話ってなに？
女3 あ、そうそう。
女1 当てましょう。横山のことだろ。
女3 だー、ちがうよ。なんでよ。
女1 ちがうの？つまんね。なに？
女3 もういい。
女1 やっぱり横山のことだったな？
女3 だからちがうって。あのね、ここ売却するらしいですよ。この家。
女1 え、うそ？なんで知ってんの？
女3 うちのお母さんがうちのおばさんから聞いたんですよ。すごく高値で売れそうなんです。
女1 なんてあんたのおばさんがそんなこと知ってんのよ？
女3 それはうちのおばさんはうちの社長だからですよ。
女1 あ、そっか。
女3 そしてこの家の持ち主だからですよ。
女1 わかったって。いつ？
女3 え？
女1 いつ頃なのそれ？
女3 たぶん、早ければ年内って感じだったと思いますよ。
女1 あと半年じゃん。
女3 そうそう。
女1 みんな知ってんの？
女3 いえ、あたしただけかと…。
女1 ふーん。
女3 あ。
女1 ん？
女3 (将棋版を何箇所か指差す)
女1 (将棋版をつぶさに見る) …あんた王手っていった？
女3 い、いいました。

女1、将棋版をひっくり返す。

女3 …。
女1 ネバーギブアップ。
女3 …。
女1 …。

女3、無言で将棋版と飛び散った駒を拾い始める。

女1 ふおふおふお。

女3 …。

女1 静かだね。

女3 …。(さきほどの鬨譜を再現している)

女1 静かだね。

女3 …なんか足りない。

女1 (大声で)ね。

女3 誰もいませんからね。

女1 あ、そうなの？横山は？

女3 出かけました。なんか喪服買いに行くって。

女1 喪服？誰か死んだん？

女3 さあ、これから死ぬんじゃないですか？

女1 へえ。

女3 柴田さんは講習会です。

女1 え？休出じゃないの？講習会？

女3 なんか、えつとあれですよ。…ディーエックスエヌエス。

女1 なんで日曜に講習会やってんの？てか、柴田さんに久しく会ってないような気がする。

女3 出張したもんね、今週ずっと。

女1 ああ、そうか。仙台か…。課長ともなると大変だな。あれ年間だもんね。赤字だよあれ、

おそらく。そりやそうだよあんな仕事ばかりやってるから、ここが売却されるようなこ

とになるですよ。

女3 なんすかそれ？

女1 なに？

女3 ディーエックスエヌエス。

女1 え？知らんの？

女3 いや、知らなくてゆうか…。知らんことは…その、もちろんないんですけど。いや、最近よく見るじゃないですか会社で、だからまあ、大体は知ってはいるんですけどね、結局何な

女1　のかなーとかは思いますね…。
結局全然知らんのかい。

女3　いやいや、ええ…。すみません全然知りません。

女1　まあ、ダイオキシンの類のことですよ。

女3　…はあ、はあ、はあ…なるほど。

女1　それも知らんようだな。

女3　どうでしょうあたし。まずいですかね。社員失格ですかね？

女1　まあ、心配しなくてもそのうちダイオキシンドイオキシンて言う時代になるよ。

女3　へえ、そうなんですか。よかった。

女1　なにがよかったじゃい。でも、そうなったら、うちの会社は絶対つぶれるね。

女3　え、なにが？

女1　いや、ダイオキシンドイオキシンて言う時代がきたらさ。

女3　なんで？

女1　ダイオキシンの分析するにはね、まあ、いったら何千万もするような分析装置を買わないといけないんだよね。そんなお金ないからね。うちの会社。

女3　えー、まずいじゃないすか。なんとかならないんですか？柴田さんみたいな人もいるのに？

女1　まあ、そうだね、柴田さんぐらいのひとだったらどこでも拾ってくれるんじゃないの？何でもできるしね、あのひと。なんなりやっていけるでしょ。資格ももってるし。あたしなんかと違って（お茶を飲み干し）うー、やっつけられませんよ実際。

女3　なんか鳴ってますよ。

女1　え？

二階で電話が鳴っている。
女1　あたしか？

女1、階段の途中まで上がって帰ってくる

女1　あたしじゃなかった。

女3　柴田さんすか。珍しいじゃないすか。

女1　そうだね。惜しいなー、せっかく電話が鳴ったのにいないとは。

女3　ははは、あ、そうだ。

女3、下手にある部屋に入る。しかるのち財布を持って出てくる。

女3 このまえ電話借りました。
女1 あ、そうなの？
女3 十二、三分ぐらいしゃべりました。ので、…五十円ぐらいですか？
女1 いいよいいよ。
女3 いやいや、ほんとだめですよ。すごい借りてるんですよ最近。
女1 じゃあ、もっと払えよ。
女3 まあ、そうなんすけどね。
女1 だいたいおまえ社長の親戚だろ、買ってもらえよ電話ぐらい。
女3 無理無理。
女1 なんて？
女3 だってそのうちぜったいつぶれる会社の社長ですよ。しかも、そのすごい遠い親戚ですよ、わたし。社員にしてもらっただけでもありがたいのに、電話もくださいなんていったらうちの親に絶対殺されますよ、わたし。
女1 ふーん。
女3 岡部さん買って下さいよ。
女1 やだよ。なんでよ。
女3 めし作ってあげてるじゃないですか。
女1 意味わかんない。
女3 家事を分担してると思えばいいんですよ。
女1 なにそれ？
女3 わたしのご飯作って、岡部さんが電話を買うと。
女1 うまいこというねえ。
女3 決定？
女1 やだよ。誰も頼んでないよ。勝手に作ってるんじゃないの。
女3 ひどいことをいう。勝手に食ってるくせに。
女1 食ってあげてるのさ。感謝してほしいぐらいさ。
女3 いつか殺す。
女1 どうぞ。(お茶を飲む)
女3 ふふふ、毒入りとも知らず、ふふふ。
女1 毒ってなに？
女3 ふふふ。さあな。
女1 砒素とか？
女3 ああ、砒素とかさ。
女1 シアンとか？

女3 ああ、シアンとかさ。

女1 シアンってなに？

女3 ふふふ。知らん。

女1 能無し社員め。

女3 ふふふ、くそう。

女3、お茶を入れる。

女3 死ね岡部。

女1 おう、いただきます。

女3 死ね死ね死ね。そして九つの地獄を徘徊しろ岡部。そしてそこであのいとしい女と再会しろ岡部。

女1 ごちやごちやうるせーよ蛭名。

女3 (茶壺を持って)ちっ、なくなりやがったぜ。

女1 あのさ、

女3 なんだよばばあ。

女1 殺す。

女3 すいませんすいません。なんすか？

女1 いや、砒素はばれるよ。

女3 え？

女1 砒素なんか入れても調べられたらすぐばれるよ。

女3 そうなんすか。困ったな。

女1 あたしのお勧めはセレンだね。

女3 セレン。

女1 うん、セレン。知ってる？重金。重金属類。知ってる？

女3 知ってます。

女1 知らないなら知らないと言えよ。

女3 知りません。なんすかそれ。

女1 そういう物質があるんですよ。だからね、たとえばセレン酸ソーダをね、もやしとかねぎのことにかけてね、炒めるんですよ。それをさ、毎日食わすのよ。絶対ばれないね。

女3 ふんふん。

女1 大体さ、砒素とか水銀とかなら警察も絶対調べるじゃない。内臓なんか調べたら一発だよ。でも絶対セレンなんか調べないからね。もう、どっから見てもただの肝硬変だよ。

女3 ふんふん。

女1 まあ、時間かかるけどね。

女3 え、かかるってどんぐらいかかるんですか？

女1 四、五年。

女3 長っ。

女1 まあ、そこが欠点だけど。

女3 だめじゃないすか。だいたいそんなの、普通に売ってるんですか？

女1 売ってる売ってる。

女3 え？普通の薬局とかで？

女1 あー、売ってないかも。

女3 駄目じゃないすか。

女1 だからうちの会社から発注すればいいじゃん。

女3 そんなのばれればですよ。

女1 発注書書いてんのあんたでしょ？

女2、玄関より登場。軽装、顔に絆創膏、そして手にレコードを一枚持っている。

女1 おう、おかえりです。

女2 ただいまです。

女3 …。

女1 (女2のレコードを見て) 何々？

女2 え？

女1 それ。

女3 ステング先生ですよ。ついにポリス解散ですよ、ポリス解散ですよ。

女1 あ、そ。ファーストなんとか飲む？

女2 え？

女1 紅茶。砒素入ってるけど。

女2 飲みません。

女2、下手奥に去る。

女1 ポリスかあ。ポリスっていいの？

女3 さあ。

女1 無知なやつじゃ、おまえは。

女3 おいおい。

女1 まあでもポリスなんて名前からしてセンスないよね。きつとよくないよ。

女3 そうすか。

女1 よくないに決まってるよ。…どうなの？横山は？
女3 え？
女1 え？じゃなくてさ。
女3 あれ、なんなんすか？
女1 あれって？
女3 「壁ノ花団」。
女1 原付に張ってあるやつ？よく見つけたね。かわいいでしょ？
女3 そうかな？
女1 あげようか？
女3 あ、ほんじゃください。
女1 それがもうないのよ。
女3 なんじゃそりゃ。
女1 でもたぶんあそこに（たんすを指して）いっぱいあると思うんだけどな。開かないしな、
女3 あれ。
女1 死んだ人でしょ。
女3 よく知ってるね。
女1 あんたが教えてくれたんじゃん。
女3 え？そうだけ。そうだね。柴田さんがしゃべるはずないもんね。
女1 柴田さんがすごい好きだった人なんですよ。
女3 おう。そんなことまでしゃべったのか、あたしは。
女1 岡部さんね、自分でどう思ってるか知らないですけどね、ものすごく口が軽い人間だと思
女3 っておいたほうがいいですよ。
女1 え？このおいらが？
女3 このおいらがじゃねえよ。そのお前がだよ。前も一回それで横山を怒らしたの気付いてま
女1 す？
女3 なにそれ？
女1 しばらくあの子、岡部さん無視してたじゃないですか？
女3 え？いつごろ。
女1 え？知らないの？
女3 知らない。なにそれ？
女1 うそ？あんなに露骨だったのに？
女3 いつごろ？
女1 もういいです。
女3 教えて教えて。なにそれ？

女2の部屋からステイキングの「ブルータートルの夢」の一曲目が大音量でかかる。音量すぐ下が
がる。

女1 わ、聞いてたのかな？怒りの表現かな？

女2 (袖から) すいませーん。

女3 違ったようですね。

女1 うん。いつごろ？

女3 なにが？

女1 なにがじゃなくてさ。横山が怒ってたというの。

女3 もういいじゃないですか。

女1 いくないよ。そもそもなんで怒ってたの？

女3 いいじゃないですか。もういいみたいだし。

女1 気になるじゃないか。

女3 直接聞いたらいいじゃないですか。

女1 うーん。全然心当たりがない。むずかしい女だよね、あいつ。あんたも大変だね。

女3 それよりなんなんですかそれ？

女1 なんなんだろうな？

女3 いやいや、それ。壁ノ花団。

女1 ぁあ。むかし結成してたの。

女3 だからなんなんですかそれ？

女1 何だったんだろうなあ。

女3 どんな活動してたんですか？

女1 どんな活動してたのかなあ。

女3 おいおい。忘れたんですか？そんな前じゃないでしょ？

女1 うん、そんな前じゃないなあ。

女3 上の空で会話してませんか？

女1 上の空で会話してるなあ。

女3 死ね。

女1 なに？

女3 聞いているじゃないですか。

女1 聞いているよ。ちゃんと答えてるじゃないの。

女3 どんな活動してたんですかそれ。

女1 うん、どんな活動してたのかなあ。いやほんと、すぐ解散しちゃったからね。

女3 なんて？

女1 うん。死んじゃったんだよね、バイク事故で。聞いてない？

壁ノ花団

女3 女2 女3 女2 女1 女2 女3 女2 女1 女3 女1 女2 女3 女1
：（女2を見ている）
：。
なんすか？
別に。（女3に）和菓子も出しておあげ。
和菓子もうないです。
残念。和菓子ないって。
（お茶を注（ごう）として）お茶もないんですけど。
あ、うん。
そうだった。もうないのだった。
もー。
いろいろ謝（まご）とくよ、ごめん。
いろいろ？
喪服は？
：え？ああ、やめた。
なんで？

女2、台所へ行きカップを一つ持ってくる。

女2 女1 女2 女1 女2 女3
はいよ。
カップ持ってきたな。
その、へんな紅茶ください。
え？あ、びっくりした。なに？
やっぱりください。
団長ですか？じゃあ、なんで知らないの？

女2、出てくる。

女1 女3 女1 女3 女1 女3 女1 女3
ああ、それは聞いたかもです。
そういうことですよ。
どういう意味なんですか？壁ノ花団って？
ああ、なんか、たしかアメリカでそういう団体があったのよ。そこから、採ったのよ。
どういう団体？
そこまではわからない。
無知なやつめ。団員だったんでしょ？
ああ。無論、中心的存在ではあったさ。

女2 …どうも、気分が乗らなくて。
女1 あんた、黒い服いっぱい持ってんじゃん。
女2 そうなんですけどね。でも駄目みたいなんですよあんなんじや。岡部さん持ってます？
女1 喪服？持ってるわけがない。
女2 わけがないって、先輩年いくつよ？
女1 十八。
女2 …いや、精神年齢じゃなくってさ。
女1 なら、三十一。ちょっと待ってあんた今精神年齢って言った？
女2 いうわけないじゃないすか、そんな失礼なこと。
女3 あたしも持ってない。
女2 ふーん。ならやつぱりいいか。
女1 まだいいよ。誰かが死んでから買えばいいよ。(女3に)な。
女3 でも、お金もらってるんですよ、この人。親から。
女1 え？いくら？
女2 …五万。
女1 な、ご、五万？もつたいない。返すの？
女2 返しますよ。
女1 うそだね。
女2 なんでよ。
女1 本当に返すのかい？いってごらん？あたしの…鼻を見ていってごらん。
女2 …鼻？
女1 さあ。どうなんだい？
女2 (女1の鼻をじっと見ながら)…そんな…返すわけ…ないじゃないですか、…親にもらったお金なんか。
女1 ふん。ほらごらん。これがマジックさ。
女2 何が起きたんだいったい？
女3 いいなあー。五万円か。
女2 うるさいよ。
女3 …。
女2 岡部さん楽しいですかバイク？
女1 最高。もう最高ですよ。しかし君の五万円でおいしいもんが食べれたらもっと最高だよ。
女2 やです。
女1 なんでえ？おごってくださいよ後輩。
女2 やだよ先輩。なんでそんな厚着してるんですか。風邪？
女1 ちがう。逆に寒くないのか、と。きみたち。

女2 寒くないですよ。何月だと思ってるんですか？暑くないんですか？
女1 暑いよ。熱いのが好きなんだよ。
女2 そうですか。
女3 聞かないの？ポリス。
女2 いまダビング中。だからポリスじゃないんだってば。
女3 ポリスじゃないの？（女1に）ポリスじゃないらしいですよ。
女1 ……そうか。（女2に）…ポリスじゃないらしいな？
女2 重要な事なんですかそれ。
女1 いや。しかし重要なこともあるにはある。
女2 なんですか？
女1 北口のさらに北のほうにすばらしいインド料理屋さんができたの知ってますか？
女2 だからおごりませんてば。
女1 なるほどな。しかし残念ながらその答えは予想の範囲内だな。ふっふっふ。
女2 よくわかんないけどなんか勝ち誇ってる。
女1 ふおふおお。
女3 いや、勝ってないな。負け誇ってるんでもいいのかな。

女3 台所へ茶碗、茶壺を下げに行く。

女1 そうよ。わたしは負け際に強いよ。
女2 負け際？
女1 そうさ。
女2 負け際って何ですか？
女1 つまり、…こう、相撲に負けて、勝負に勝つって言うかね…。
女2 ……うん…ん？
女1 つまり、長崎の敵を…江戸で討つっていうかね…なんかそういうね。…理論的に言うかね。
女2 ……はいはい。え？
女1 だから、逆に言うとき。…江戸の敵を長崎で討つというかね…。
女2 うん、まあ、それはたしかに逆だけど…。
女1 ……なんかそういうね…。
女2 たとえば…平たく言うかどうか？
女1 つまり…平たく言うとき…。

女3、戻ってくる。

壁ノ花団

女2 おつ、いくいく。

女1 …平たく…言うとは…。

女2 でもなんとなく、たしかに負け際に強そうだ。そんな感じが伝わってくる。

女1 だろうがよ。伝わってきただろうがよ。ひしひしとよ。

女2 負け際に強いとなんかいいことあるんですか？

女1 あるよ。

女4、上手から登場。軽装。

女4 ただいま…です。

女12 (声をそろえて) おかえりですつ。

女3 あわてて出てくる。

女3 おかえりですつ。

女4 …しまった。なんか慣例化してる。

女1 紅茶飲みますか？

女2 かしもうないんです。

女3 入れましょうか？

女4 いい。ありがとう。

女2 あたし絶対飲むー。

女3 (台所から) 岡部さんはー？

女1 あたしもいい。

女3 (台所から) ほいほい。

女4 (女1に) なにあれ？

女1 え？

女4 ステッカー。なんで持ってるの？

女1 持っていました。

女4 …なんで？

女1 もらいました。

女4 福永さんに？

女1 そうすよ。

女4 …なんで？

女1 いいじゃないすか、別に。

女4 …なんで？

壁ノ花団

女1 …いいじゃないですか。…別に。
女4 …別にいいけど。

女4、いったん去ろうとする。

女4 別にいいけど。
女1 …はあ…。

女4、去る。

女1 (独り言のように)…駄目すかね？

女1、立ち上がる。

女2 岡部さん…。

女1 うん…。ちよっと出てくる。

女2 あ、はい。

女1、去る。

しばらくして、女3出てきて座る。

女3 …。

女2 …。

女3 …バナナ入れた。

女2 バナナ？

女3 バナナフレーバー。他は何にも入れてない。

女2 うん。

女3 …いいかな？

女2 いいよ。

女3 あれはいいの？

女2 ん？

女3 レコード。

女2 ああ、そうだった。

女2、去る。女1戻ってくる。

壁ノ花団

女3 ?
女1 鍵忘れた…。
女3 …。

女1去る女3も去る。しばらくして女3茶器セットもって出て来て座る。腕時計を
はずして机の上に置きみている。女1出てくる。

女1 行ってきます。
女3 はい。

時間が来てお茶を入れる。一人で飲む。

女3 あち。

女2、しばらくして出てくる。

女2 いただきますです。
女3 どうぞです。

女2、お茶を飲む。

女3 どうですか？
女2 うまいです。

女3 …治ってきたね。

女2 え？

女3 硫酸。

女2 ああ、(絆創膏に軽く触る)もうちよつとかな。

女3 さっきの何だろう？

女2 うん。…さあ。

女3 ステッカーがどうか言ってたよね。

女2 壁ノ花団？

女3 うん。見たの？

女2 うん。

女3 なんか昔、あったらしいよ。岡部さん団長だったらしいよ。

女2 え？岡部さん？そういつたの？
女3 うん。
女2 ふーん。講習会ってなに？
女3 ああ、柴田さん？なんかディーエヌエーの講習会だって。
女2 DNA？なんで？
女3 なんかもそのうちDNA DNAって言う時代になるんだって。
女2 もうなってるよ。
女3 え？うそ。やばいじゃん。
女2 なにが？
女3 会社つぶれるじゃん。
女2 なんでよ？関係ないじゃん。
女3 なんで関係ないの？
女2 なんて。だって業務内容違うじゃん。分析業務委託会社だよ、うち。遺伝子なんて扱えるわけないじゃん。
女3 うん。：そうなの？じゃ、なんでそんなに柴田さん行ってるの？
女2 いや、それを聞いてんだよだから。なんで？
女3 なんてだろうね。
女2 お前とはお話ならん。
女3 まさか、転職とか考えてるんじゃない。
女2 それはないよ。
女3 なんてわかるの？
女2 。。あたしもさあ昨日リアルな夢見たんだよね。
女3 。。え？なんて？
女2 リアルな夢。
女3 。。あたしもって、あんたと誰？
女2 スティング。夢でね、青い亀が四匹出てきて地面を掘り返してたんだって。知ってる？知らない。
女2 で、それみて、ポリス解散しようって思ったんだって。つまり亀が自分たちだって思ったんだって。だからアルバムの名前がブルータートルの夢なの。知ってる？
女3 だから知らないって。
女2 うん、そうそう。
女3 。。で、あなたのリアルな夢ってなによ？
女2 いやさ、そうそう。あのね、かえるがね、がまがえる。エプロンして立ってるのよ。大きな滝のそばに。でね：
女3 あのさ。

壁ノ花団

女2 なに？
女3 あんたリアルって意味わかってる？
女2 馬鹿にしてんの？
女3 ううん。
女2 でき、そのかえるが作った料理があつてね、ミミズとかの焼いてあるの。
女3 …ほいほい。
女2 でも、おいしそうだったのよ。
女3 ほんとに？
女2 うん。
女3 それで？
女2 そんなだけ…。
女3 …ほいほい。…で？
女2 どういう意味だろう。
女3 意味があるの？
女2 ないか、やっぱり。
女3 わかんないけど。
女2 なんかないかなー。
女3 …おいてめえ。
女2 なに？
女3 みてないだろ。そんな夢なんか。
女2 なんでわかるのよ。
女3 わかるよ。
女2 だからなんでよ。
女3 わかるよ。そしてそのかえるがあたしだといいたいのだな。
女2 ちがうよ。
女3 ちがわないね。
女2 きょうなに？
女3 めし？食うの？
女2 おう。食ってやるよ。きょうなに？カレー的なもの？
女3 なんにしよかな？カレー的なものは先週作った。なんかある？
女2 (カップを持って立ち上がり) ない。
女3 ほいほい。
女2 …。
女3 …なに？
女2 …ほいは一回でいい。

女3 　　はい。

女2、カップを持って下手に去る。女3、残りのお茶をゆっくり飲む。おかわりして全部飲む。女2上手から出てくる。女3の絆創膏のあったところに大きなガーゼが当ててある。そのままたんすのところに行き、針金のようなものを鍵穴に差し込み女開けようとしている。女3、机の上の腕時計をはめて、茶碗と茶壺を台所に下げる。女3、台所より登場し、下手に去る。夜になる。

第三場

雨が降り始めたような音が聞こえる。暗闇の中で女2がたんすの鍵を開けようとしている。いつの間にか女4が立ってそれを見ている。しばらくして針金を検分する。

女2 　　わかった。

針金がある形に整えて再度鍵穴へ突っ込む。すぐに引き出しが開く。懐中電灯で照らして中を物色している。

女4 　　よく開いたね。

女2 　　あ…。

女4 　　…。

女2 　　あの、…すみません。(引き出しを閉めようとする。)

女4 　　いいのよ。せっかく開いたんだし。

女2 　　いやでも、あのすみません。

女4 　　いいのよ。面白いもの、なんか入ってた？

女2 　　あの、暗くてよく見えななんです。

女4 　　そう？(近づいてきて)貸して。

女4、懐中電灯を女2より受け取り照らす。

女4 　　はい。

女2 　　いや、もう…ほんと…いいです。

女4 　　いいのよ。…あたしも見たいから。

女2 　　はあ…。

女4 　　すごい、ほんとに開いてる。

女3 …。

女4 横山さん、すごいよね。私も実は何度か開けようとしたことあるの。

女2 え、そうなんですか？

女4 うん。全然だめだったけどね。

女2 そうなんですか。

女4 横山さん、ぱっぱと開けちゃったもんね。すごいよね。得意なの？泥棒とか。

女2 泥棒って。いやいやいや、全然そんな…。

女4 私全然だめなのよ、泥棒とか。

女2 いや、私も得意なわけでは…

女4 あ、そう。続けて。

女2 はあ、それでは失礼して…。

女2、中に入っているものを取り出してみる。人形のようなもの、派手な仮面、本、カセットテープ、アルバム。など。

女3 おつ、卒業証書、すごい京都大学だ。あれ？

女4 なに？

女3 柴田さんの先輩ですか？

女4 そうそう。年は私のほうが上だけど。

女2 そうなんですか。

女4 うん。この人のおつてでこの会社入ったもん。

女2 え？なんでうちみたいいな小さな会社に？京大なのに。

女4 さあ、それは聞いてない。

女2 柴田さんは？

女4 …なんでかな？それはなに？

女2 どれです？

女4 それ、その袋。

女2 (見て) 水着です。げっ、しかもおそらくこれはビキニですぜ。色がよくわからないですけど、けっこう派手っぽいです。子供用ですかね？

女4 へー、知らないなー。そんなの見たことない。それなに？

女2 …ピアノの楽譜です。ベートーヴェン。

女4 「テンペスト」？

女2 えっとね…「月光」です。

女4 そう。「テンペスト」ないかなどっかに？

女2 「テンペスト」？…えっと…好きなんですか？

女4 聞いたことあるの。一度、福永さんが弾いてくれた。だから曲はよく知らない。最初の「ばかぼんばかぼんばかぼんばかぼん」ってどこしか知らないんだけど。横山さんは知ってる？ 確か音楽詳しいのよね？ すごくむずかしい曲なんですよ。全然知りません。すいません。…もうないみたいですよ楽譜は。
 (本を一冊取り上げる)
 女2 何ですかそれ？
 女4 ユダヤジョーク研究。
 女2 へえ、ジョーク好きな人だったんですか？
 女4 いや、全然だめな人だった。
 女2 へえ…。勉強のためですかね。
 女4 そうかもしれないね。すごい、赤線引いてある。実践1 質問に対し質問で答える。
 女2 え、なんですかそれ。
 女4 例 外国人「なぜユダヤ人はいつも質問に質問で答えるのか？」ユダヤ人「ならばどうしてユダヤ人は質問に質問で答えてはならないのか？」
 女2 おもしろいですかね？ なんか、むかつきそうですけどね。
 女4 解説がある。比較的应用が利くので、覚えておくと日常生活でも、たいへん役に立ちます。
 女2 いや、そうか。役に立つのか。
 女4 覚える？
 女2 あ、はい。
 女2 ……なんですかそれ？
 女4 壁ノ花団活動実績記録。
 女2 なんですかそれ？
 女4 昔つくった秘密結社。
 女2 秘密結社？
 女4 うん。ほんとは秘密でもなんでもないんだけど。このひと、福永さんとあたしともうひと、藤田さんという前ここにいたんだけどちょうどあなたの部屋の前の住人だった人とね、三人で作ったの。
 女2 プラトン、の人ですね。藤田さん。
 女4 あ、そうそう。なんかさっき話したっけ？
 女2 あ、やっぱり記憶はあったんですね？
 女4 あったよ。そんなに酔ってなかったもん。
 女2 いやいやいや、そんなことはないでしょう。
 女4 酔ってない酔ってない。
 女2 じゃ岡部さんはいって来るまだ前ですか？ 秘密結社があったのって。
 女4 いや、岡部さんはもういたんだけど、団員じゃなかったな。…なんかねえ、団員資格みた

いなのがあって、彼女はそれを満たせなかったのよ。そうそうそれで入れなくて、泣いたのよ、あの人。：あれ？なんだったかなー団員資格。なんだか、ふだんは気象の穏やかな人なんだけど、福永さん。でもあの時だけは厳しかったな。絶対駄目えーってね。そのあと岡部さんの部屋にね、藤田さんとあたしと二人で慰めにいったのよ。そしたら泣き出してね。ずっと泣いてたな。多分あれ朝まで泣いてたんじゃなかな。だって次の日会社休んだもんね、岡部さん。

女2　：ですか？

女4　かわいいよね。

女2　かわいいというか。：それがいまやあの体たらくか、と。返す返すも残念だ、と。

女4　あれえ…なんだったかなー、団員資格。

女2　読んでも…？

女4　ああ、はい。(ノートを渡す)

女2、しばらく読んでいる。女4それを見ている。

女2　へえ…壁ノ花団活動実績記録。福永優子。一九八〇年。：え、と五年前だ。三月一日、これより壁ノ花団と名乗ることが決まる。前からつけたかった名前がつけられてうれしい。名前の由来を説明しようと思ったが、小説の名前を忘れてしまった。あとで必ず調べておくこと。活動目的については追って決めていく予定。三月三日、活動車種決定する。本田技研工業。タクトフルマーク。三・六馬力。十万円前後とのこと。三月二十四日、購入、一九七九年式、九万三千円也。四月九日、三人で給油。レギュラーとハイオクがあったのでレギュラーを選択。満タン。ハイオクってなんだろう。今度必ず聞くこと。四月一六日、昨日の雨で桜が散ってしまって寂しい。三人で給油。レギュラー満タン。四月二十三日、ずいぶん暖かくなってきた。三人で給油。レギュラー満タン。ハイオクについて今度必ず聞くこと。ガソリン入れてばかりじゃないですか。おっ、五月二十日、上野動物園に行く。休園日なり。

女4　あはは、そうそう。帰りに確か、焼肉食べたんじゃなかったかな？そんなこと書いてない？

女2　えーと、そのまま帰り、ほうれん草のおひたしを作る。あと、豆腐。岡部さんを交え四人で食べる。

女4　あれ？あそう。

女2　へえ…。あ、活動してる。：六月一七日。野球を見る。発議者は藤田さん。二対ゼロで動議採択。柴田さんは棄権。ヤクルトスワローズ対大洋ホエールズ。明治神宮野球場。野球の応援をするにはビニール傘があるとわかった。ので、藤田さんが三本買って来てくれた。ビニール傘の経費については後日、…なんですかこれ？

女4 りんぎあんけん。

女2 稟議案件として討論すべし。帰りに雨が降って、無駄にならなかった。三人で傘を差してバイクで帰った。…危なっ。死にますよ。

女4 そうだよ。そりゃ死ぬよ。はは…。あー、覚えてるなー、それ。あたし転んだもん。ちやうど眼鏡壊れてたんだよ。あー、そうそう、だから反対したんじゃないかな、野球見るの。見えないもんね。眼鏡ないんだからさ。

女2 眼鏡は六月二十日に復活したようですよ。

女4 そう、そんなことまで書いてあるの？

女2 ここ（ノートを渡す）

女4 あ、ほんと。

女4、しばらく読んでいる。女2それを見ている。

女4 ははっ。

女2 なんですか？

女4 七月十六日。梅雨が明ける。海に行く案件を発議。三対ゼロで動議採択。藤田さんがユニフォームは思い切ってビキニではどうかと提案。柴田さんが猛反対する。柴田さんには黙って藤田さんと買いに行く。とてもよいものが見つかったので買う。これについては後日再度提案すること。

女2 …とてもよいものってしかし。…猛反対したんですね。

女4 猛反対したみたいだね。

女2、ページを一枚繰る。もう一枚繰る。もう一枚繰る。白紙のようだ。

女2 きれいな字ですね。

女4 うん。そうそう。

女2 へえ。

女4 …。

女2 …。

女4 なんて猛反対したのかな、私。

女2 …。

女4 ねえ…。

女2 はい？

女4 はい（ノートを渡す）…どんな人だったと思う？

女2 …え？

女4 想像してみて。この字みて想像つかない？

女2 え？いや…。いやあ、無理っすよ。

女4 そう。

女2 全然わからないですよ、そんなの。こう、想像力というものが…いまいち足りなくなつて…。
女4 なんでもいいのよ。

女2 …はあ…。

女4 …。

女2 ああ…そうですね…。髪はすごくまつすぐで…。

女4 うん…。

女2 あつてます？

女4 …他には？

女2 他ですか？…背が高くて…すらつとしてます。

女4 うん。

女2 おっぱい小さいです…でも足はでかいです。…二五センチぐらい…。指が…ながいです。
なのでピアノが得意です…お酒はすごく弱いです…。

女4 (笑う)

女2 ちがいます？

女4 …それで？

女2 それで…理科が得意です。…国語も得意です。…足が遅いです。いや、速いです。学級委員をやりました。…何回もやりました。…ピアノが得意です。…合唱コンクールのときはいつも前でひとり、伴奏をやらされました。…でも、ほんとうは歌いたかったです。みんなと一緒に歌いたかったです。毎日毎日ピアノは練習しました。…好きなのはベートーヴェンとショパンです。ほんとうに毎日毎日ピアノは練習しました。でもやめました。好きな人ができたからです。好きな人がピアノが嫌いな人だったからです。好きな人が嫌いなものは、嫌いにならないといけないのです。だからピアノが嫌いになりました。でもピアノが嫌いな人なんているのでしょうか？それは何度も考えたけど、私にはわかりませんでした。ピアノが得意だつてすごく自慢だったのに。

女4 (ピアノを弾くまねをする) じゃーん。

女2 ピアノが嫌いな人なんて本当にいるのでしょうか？

女4 ばかぼんばかぼんばかぼんばかぼんばかぼんばかぼんばかぼん。なんだたかなー
団員資格。全然思いつけないやー。くそー。

下手扉が開く。女3、下手から出てきて通り過ぎる。女4、相変わらずピアノを弾き続ける。

女3が消えると、女2あわててたんすを直す。そして女4のとなりで同じようにピアノを弾き始める。女3、帰ってくる。そのまま行きすぎようとする。だいぶ寝ぼけているようだ。しかし気

づく。

女3　　えー？

女2、4弾き続けている。

女3　　なにやってんの？

女2　　…なにかやってんのはいけないのか？

女3　　ん？

女2　　うー失敗したー。

女3　　え？なにが？

女2　　くそー。ユダヤジョーク失敗したー。

女4　　あ、ごめんなさい。うるさかった？ピアノ。

女3　　ピ、ピアノ？ピアノって？あ、それですか？ピアノだったんですか？

女4　　見えなかったかしら？

女3　　いやいや、そんなことは…その…：…オ、オルガンかと。…でもどつちにしてもうるさくはないんです。ただ、なにやってんのかなって。いや、なんなのだろうわたしは。これは寝ぼけているのだろうか？私のほうがおかしいことを言うてるのかもしれない。全体的についていけない。すいません、あした改めて聞きます。必ず教えてください。おやすみなさい。

女2　　おやすみ。

女3、部屋に帰る。

女4　　あれ、なんだっけ？

女2　　え？

女4　　あ、そうだった。水を飲みに来たのだった。

女2　　あ、そうなんすか。

女4、台所へ行く。女2、鍵を掛ける作業。女4、出てくる。

女4　　あれ、なに？

女2　　いや、鍵掛けとかないと、思っって。

女4　　ああ、そうか。わたしはもう寝るけどいいかな。

女2　　ああ、いいです。やっときます。おやすみなさい、です。

女4 やめてよそれ。さっきは酔ってつてごめんなさい。
女2 いえいえ、なかなか楽しかったです。
女4 ありがとう。
女2 え？
女4 開けてくれて。
女2 あ、いや。

女4、階段に登りかけて止まる。

女4 あなたたち、学生みたいね。
女2 え？
女4 あなたと蛭名さん。なんか楽しそう。
女2 ぜんぜん楽しくないっすよ。
女4 彼女、あなたのこと好きなんでしょ？
女2 ……すみたいですね。
女4 優しくしなきゃだめよ。
女2 ……しますよ。
女4 そう…。また開けてね、鍵。
女2 ああ、はい。いつでも。
女4 似てるわよあなた。あなたたち。
女2 え、だれに？
女4 似てないかな…。

女4、去る。女2、たんすのどこに行き鍵穴に針金を突っ込み施錠しようとする。

第四場

女2、たんすに針金を突っ込んでこねくりまわしている。かなり真剣。女1上手奥から出てくる。手に一本ドライバーをもっている。

女1 これはどうよ先生？
女2 どれですか？
女1 これ。(と、ドライバーを見せる)
女2 わりっしょ、そんなの。太すぎですよ。穴に入りませんよ。

女1 そうか？（鍵穴に入れてみる）そうか。
女2 もう、いい感じのどこまでいったのに。
女1 それはそれは。

女2 （再び針金で開けながら）いま何時ですか？
女1 ん？わかんない。あそう、あんたビデオ買ったんだって？

女2 ∴。（真剣）

女1 ねえ、先生。

女2 買いましたよ。見てきてくださいよ。

女1 いいの？

女2 ビデオじゃないよ時計だよ、すかぼんたん。

女1 てめえ、よくもそんなでかい口を。（腕時計見て）八時半。

女2 時計してんじやん。

女1 うん、忘れてた。なんか借りた？ビデオ。

女2 まだです。ていうか、まだつないでないんですよ。ビデオとテレビ。

女1 やったげよ。

女2 ほんと？うれしい。お願いします先生。

女1 まかせてまかせて。

女2 それにしても、もう八時半かあー。

女1 まだまだ。行ける行ける。十時：九時半までは大丈夫じゃないの？

女2 もうなんか疲れてきた。開かないですよこれ。

女1 先生え先生え先生えー。こんなチャンスもうないんだからさ。もうちよつとがんばってよ。

女2 怪我人なんですすよ私は。

女1 精神力でカバーしてよ。

女2 もういやです。

女1 ねえ、ちよつと。わたしの身にもなりなさいよ。

女2 自分で勝手にドタキャンしたんじゃないの。

女1 あんたもそうじゃないの。

女2 だから私はしようがないじゃないですか。

女1 ねえねえねえドラえもん。

女2 もう、しょうがないなあ。

女1 オッケイ。さあもう一本。さあもう一本。レッツゴウ。

女2 開錠作業を再開する。

女2 （針金が曲がったりする）あ、くそう。

女1 なに？

女2 失敗した。

女1 大丈夫。さあ挽回。さあ挽回。レッツゴウ。

女2 (あきらめて) いやー。もういやー。無理。

女1 ヘーイ、カウボーイ。カモン。

女2 じゃあ岡部さんやってくださいよ。

女1 …ノウ。

女2 なんですよ。

女1 …無理。

女2 なんでもう、人にやらせてばかりで。あれっ？

女1 ん？

女2 …。

女1 …。

女1、女2、慌てて後片付けして、机に座る。

女3 (上手から声) ただいま。

女1、2 おかえり。

女3、4 上手から出てくる。女3は女4を支えている。

女1 早いじゃない。なんで？

女3 ええ、ちよつと。(女1を見て) なんているの岡部さん。

女1 なんてだっけ？

女3 今日なんか古い友人が急に上京してきたんじゃないんですか？

女1 あ、うん。終わった。

女3 そうなんですか。(女4を座らせようと) 柴田さん、ここに…。

女1 どうでした？盛り上がりました？送別会のほうは。

女3 途中で帰ってきちゃった。

女1 なんぞ？

女3、台所へ行く。

女4 (女2に向かって) ただいまです。

女2 あ、おかえりなさい。

女4 (首を振って) ただいまです。

女2 え？

女4 (自分を指して) ただいまです。(女2を指して) おかえりです。

女2 え？

女4 わかった？ ただいまです。

女2 お：おかえりです。

女4 うん。

女3、台所からコップに水を入れてもってくる。

女2 (女3に) どう…？

女3 なんか、酔ってるみたいなの。で、部長が連れて帰れて。

女2 何だ酔ってるのか。わかりにく。

女3 柴田さん、これ。

女4 サンキューです。

女1 へー。(女4に) 大丈夫ですか？

女3 再び台所へ。

女4 (女2に) 大丈夫、です。え、あなたなにそれ？

女2 いやちよと、硫酸がかかっちゃいまして。

女4 えー。大丈夫？ ですか。

女2 大丈夫とは思いますが。

女4 希釈したやつ？

女2 いえ、一〇〇%です。原液です。

女4 大変じゃない。

女2 はあ…。

女4 病院行った？ ですか？

女2 行きました、です。なんで送別会のほうは欠席させてもらいました、です。

女4 何してたの？

女2 あの、有機物を分解してて、そんときに。

女4 すぐ洗った？

女2 すぐ洗いました。

女1 しかも超純水で。

女2 うるさい。

女4 超純水で洗ったの？

女2 いやちよつと、慌てて。手元にあつたので。

女4 それはねえ、馬鹿、です。

女2 わかってますって。慌ててたんですって。

女1 馬鹿です。

女2 もう。

女4 大変じゃない。

女2 はあ…。

女4 …病院行った？

女2 だから行きましたって。

女4 ふーん。…なにしてたの？

女2 え？…だから有機物を分解しててたんですって。

女4 あ、そう。…すぐ洗った？

女2 すぐ洗いました。超純水で洗いました。慌ててました。馬鹿でした。

女4 ふーん。大変じゃない。

女2 はあ。

女4 病院行った？

女2 行きました。ちよつと蛭名あー。

女3 はいー。

女3、出てくる。

女3 なに？

女2 …いや。…どうしよう。これ。(女4を指す)

女3 うん…。

女2 あんたなにしてるの？

女3 紅茶作ってる。

女2 そんなのいらないし。

女1 それより水もう一杯持ってきて。

女3 あ、はい。

女4 おなかすいたねえ。

女3 え？さつき食べたじゃないですか、ちゃんこ。

女1 え？送別会、ちゃんこだったの？とらとら？

女3 とらとら。

(苦渋にゆがむ顔)

女3　　なんで？掲示板に張ってあったじゃん。
女4　　おなかすいた、です。
女2　　あ、はい。(女3に)なんかあるの？
女3　　ごはんだけならある。他は何にもないと思う。
女2　　柴田さん。ご飯だけなんですけどどうします。
女4　　食べます。
女3　　え、ほんとに？

女3、台所に去る。

女2　　ご飯だけって。ご飯だけ食べるんですか。
女4　　はい。もりもり食べますよ。
女2　　あの、お茶漬けにでもしたらどうです？
女1　　お、いいじゃないですか、お茶漬け。
女3　　(袖から)卵がありましたー。(顔を出して)しかも四つ。
女1　　お、いいじゃないですか。貸して貸して。
女3　　はぁ(貸す)
女2　　雑炊、どうですか？雑炊。
女1　　いいじゃないですか。
女3　　さつき、たべたんですけど、おじや。
女4　　私食べてない。
女3　　食べましたって。柴田さん。
女4　　食べてない、です。
女3　　食べました。
女4　　…食べてないです。…食べてないです。…食べて…
女3　　わかりましたって。
女4　　うん。…食べてないです。
女2　　しつこいです。
女4　　…ふふふ。「正しいことは何度でも言うのがよい。」
女1　　あつ。…待って待って…。
女1 4　　プラトン。(二人で笑う)
女1　　懐かしい。
女4　　懐かしいねえ。
女1　　でも、ちよつと違います。…プラトン。です。
女4　　あ、そうか。ふふふ。

女2　なんか違いました？、いまの。

女1　全然違うよ。

女3　だれの真似ですかそれ。

女1　（女2を指し）この子の前にあの部屋住んだ子。藤田東子。

女2　ああ。へえ。

女4　いいねえ、卵四つ。あたしこれ。

女2　…ええ、どうぞ。

女4　名前書いとこつと。（ポケットからマジックを取り出し書く）し・ば・た、と。

女3　あ、あの…。

女1　じゃあ、あたしも。（ポケットからマジックを取り出し）お・か・べ、と。

女2　（しかたなくポケットからマジックを取り出し書く）よ・こ・や・ま。

女3　なんでみんなマジック持ってるんですか？

女1　…職業病だよ。

女3　あそう。

女1　ついでだから書いとくよ。

女3　はい。

女4　おなか減った。

女3　ほんとですか？

女4　ほんと。めしはー？

女1　めしはー？

女2　めしはー？

女4、立ち上がり、上手奥に消える。

女3　めしって、これからですよ。

女1　早くしなさいよ。

女3　もうー。自分でやったらいいじゃないですか。

女1　あなたの仕事でしようそんなことは。

女3　だってあたし、いらぬもん。

女1　いろいろいるまいが、あなたの仕事なのさ、そんなことは。

女3　もー。

女3、台所へ去る。

女1　…。

女2 …

女2 岡部さん。おなか減ってるんですか？

女1 え？

女2 さつき食べたでしょ。カレーうどん定食ダブルを。

女1 食ったねー、そういやさつきカレー的なものを食ったねえ。

女2 はい。

女1 よく考えたら、おなかいっぱいだよ。

女2 なんでもよくかながえないのよ。

女1 どうしょ？あんたなに食った？

女2 普通のうどんを。カレー的でないものをシングルで。

女1 オッケイ。あんた食べてよ。

女2 えー？岡部さん食べないの？

女1 そりゃちよつとは食うけどさ…。

女3 (袖から) あー。

女1 (袖に) なに？どうした？

女3 (顔を出し) たまねぎ一個ありました。

女1 うん。どうする？

女3 炒める？おなかへってるんだよね、みんな。

女1 うん。割とね。割と減ってるよもちろん。

女3 炒めようか？

女2 変なことするなよ。

女3 あの…

女1 ぜひそうしよう。(女2に) な。

女2 …いいけど。

女1 作ってくれ。

女3 …作るよ。

女2 …いいよ。

女3 うん。

女3、台所へ戻る。

女1 あんたもさあ。

女2 なんすか。

女4、帰ってくる。机の上にパックに入った卵が四つある。

女2 大丈夫ですか？

女4 うん、全然大丈夫：なんだっけ？この卵。

女1 えー？ほんとですかー？

女4 え？ごめんなさい。なんだっけ？

女2 あの、これから雑炊を作るんです。：柴田さんが食べる用の。

女4 うん。ごめんなさい。食べれないかも：。頭痛い：。

女2 水いります？

女4 ごめんなさい。お願い。

女1 蛭名あー。

女3 (台所から顔を出す。泣いている) はい？

女1 水ちようだい。頭痛いんだって。

女3 あ、はい。

女1 大丈夫ですか。

女2 あたし薬持ってますよ。

女3、泣きながら水を一杯持ってくる。女2に渡す。

女3 はい。(台所に行く)

女1 柴田さん、水です。

女4 ありがとうございます、ごめんなさい。

女2 そんなに飲んだんですか？

女4 わかんない。

女1 雑炊どうします？

女4 ごめんなさい、ほんといらない：。

女1 わかりました。(台所に) 蛭名あー。

女3、泣きながら顔を出す。

女3 はい。

女1 雑炊中止。

女3 えー？ほんとにー？

女1 柴田さんが食べれないっていつてんのよ。ほらごらんよ、これを。

女3 大丈夫ですか？

女4 どうしたの？蛭名さんなんかつらいことでもあったの？

女2 あー、なんでもないっす。(女3に) あんたもこんなときにたまねぎ切ってんじゃねーよ。
まぎらわしいんだよ。
女3 だって食べるっていったじゃん。
女2 もう全部いらないし。
女3 じゃあ、火とめるよ。

女3、台所へ行く。

女1 吐いたんですか？
女4 え？なんで？
女1 ついてますよ。

女3戻ってくる。

女3 (女1に) 大丈夫ですか？(女2に) 大丈夫なの？

女2 さあ、…なんかあったの？

女3 だいぶ飲まされた。昇進祝いとか言われて。

女1 へー。

女4 ふふふ。あのね。…卵ってね、…卵じゃないんだよね。ふふふ。

女2 え？

女4 卵ってね、卵じゃないの。ふふふ。

女2 それはどういう…？

女4 だって、卵ってほんとは雛が生まれるじゃない？でも、これって無精卵じゃない。暖めてもひよこにならないじゃない。

女2 …はあ。

女4 そうだよね？

女3 ああ、…そうですね。

女4 ね。だから卵のようなものなのよ。でも卵じゃないのよ。ふふふ。…卵のようなものが四つ。

女1 …。

女3 …。(女2を見る) ふふふ。

女2 ふふふ(女1を見る)

女1 …いやいやいや。あたしは雛になりますよ。不吉な事いわないでくださいよ。

女4 ふふふ。ごめんなさい。ふふふ。あーおかしい。(立ち上がり) 寝よつと。

女3 (立ち上がり) あ、はい。ほんとに大丈夫ですか。

壁ノ花団

女2 薬ありますけど。
女4 あ、うん。大丈夫。

女4、階段を上がって去る。見送る三人。

女2 でもはじめてみた、酔っぱらった柴田さん。
女3 あたしも。

女1 (女3に) おう、しまいな。こんな不吉なもんしまっちまいな。
女3 自分でしまったらいいじゃないですか。
女1 立ってるものは親でも使えってね。

女3、座る。

女3 立ってない。
女1 立ってたじゃん。
女3 もう立ってない。
女1 ち、最近の子は…。

女1、卵を持って台所へいく。女23残る。

女2 …。
女3 …。
女2 あ、そうだ。岡部さん。
女1 (袖から) なに?…あー。
女3 どうしたんですか?
女1 (袖から) 卵一個落とした。
女3 ああ、もう。
女2 え、誰が割れたの?
女1 (袖から) うるさい。

女3、台所へ行く。女1戻ってくる。

女1 呼んだ?
女2 呼んだ。
女1 なに?

女2　　なんだったかな？もういいです。
女1　　なんじゃそりゃ。
女3　　（顔を出し）あの一、雑炊ほんともう食べませんか？

女2、下手に去る。

女3　　岡部さんおなか減ってるんでしょ？

女1　　うん。

女3　　食べてよ。あたしの卵あげるし。

女1　　いやいや、そんなわけにはいかないよ。

女3　　いいって。

女1　　なにいつてんのよ。

女3　　いいって。あげますって。

女1　　ありがとう、ほんとその気持ちだけでおなかいっぱいだよ。

女3　　え？

女1　　ごちそうさま。そしてありがとう。

女3　　もー。

女3、台所に引つ込む。女1、階段をあがって行く。女2、下手奥に去る。女3、洗い物などを終え、出てくる。部屋の電気を消して自分の部屋に去る。しばらく空舞台。雨が降り始めたような音が聞こえる。台所から濡れた雨合羽を着た派手な仮面の女が出てくる。女2、下手奥からしずかに出てくる。たんすのところまで行き、針金を鍵穴に突っ込む。いつの間にか女4が立ってそれを見ている。暗闇の中で女2がたんすの鍵を開けようとしている。しばらくして針金を検分する。濡れた雨合羽を着た派手な仮面の女が女2に近づいて来る。

女2　　わかった。

濡れた雨合羽を着た派手な仮面の女が鍵を取り出し鍵穴にそれを突っ込み、鍵をまわし、鍵を抜く。女2針金がある形に整えて再度鍵穴へ突っ込む。すぐに引き出しが開く。懐中電灯で照らして中を物色している。

女4　　よく開いたね。

女2　　あ…。

女4　　…。

女2　　あの、…すいません。（引き出しを閉めようとする。）

女4 いいのよ。せっかく開いたんだし。
女2 いやでも、あのすいません。
女4 いいのよ。
女2 ……すいません。
女4 面白いもの、なんか入ってた？
女2 あの、暗くてよく見えないんです。
女4 そう？（近づいてきて）貸して。
女2 いや、そんなも面白いです。
女4 いいのよ…。

暗転

第五場

テレビとストーブが出ている。たくさんの洗濯物が干してある。女3、エプロンをして菜ばしを手でテレビを見ている。しばらくして台所でキッチンタイマーが鳴る。女3台所へ行く。キッチンタイマー止まる。戻ってくる。再びテレビを見る。そのあと卓上の本を読む。女1が、出てくる。

女1 ただいま。
女3 （テレビをみながら）おかえり。
女1 さむい。どう？
女3 うん…。
女1 始まった？
女3 うん…。よくわからないっす。音でないし。
女1 ふーん。
女3 （女1を見て驚く）おおお。
女1 なに？だめ？
女3 いいじゃないですか。でも、えらい、ばつさり切りましたね。
女1 （髪の毛を触りながら）そうなのよ。おかげで寒いよ。
女3 当たり前じゃないの。考えずになんにも切ったの？
女1 ちがうわい。仕方ないんじゃない。あしたからあたらしい地獄が始まるのよ。
女3 地獄？
女1 先週あたし宛のサンプル大量に届いてたろ。
女3 ああ、来てた。こんな（大きい）やつ。
女1 あれあれ。あれ中身なんだと思う？

女3 え、なんすか？
女1 犬とか猫とかの内臓。
女3 えー。全部？
女1 うん。先に言っとくがな、来週からあたしはしばらく内臓臭いからな。ほんと匂いすごいよ。髪の毛とか、匂い移って全然落ちないのよ。だから仕方なく切ったのよ。
女3 そうなんすか。
女1 もう毎年ね、あたしは、この季節、これよ。そして紅茶もらうよ。
女3 どうぞ。まだまだいそがしいんですね。(立ち上がり) シナモン入ってますけどいいです？
女1 なにか？
女3 紅茶。
女1 いいよ、なんでも。
女3 ほしい。(テレビ見て) ん？
女1 ん？
女3 …。
女1 …。もう捨てようよこれ。
女3 やですよ。

女13 しばらくテレビ見ている。

女3 でも、本当に戦争になるんですかね？
女1 なったらおもしろいけどな。
女3 どっちが強いんですか？
女1 ん？
女3 米国とソ連邦は？
女1 そりゃ、米国だろ。
女3 やっぱりか。
女1 …。
女3 …戦艦ニュージャージー…。…でかつ。人間小さつ。
女1 …ほんとは、めっちゃめっちゃ弱いらしいよ。ソ連。
女3 そうなんすか？
女1 日本のほうが全然強いみたいよ。お金あるから。武器とかも新しいし。
女3 へー。
女1 ほんと日本が一番強いという話も聞いた。米国の製品てほら、故障ばかりじゃん。
女3 ああ、そうですね。

女1 日本製品は完璧だからね。武器とかもやっぱりすごいんじゃないの。

女3 これは？

女1 なに？

女3 このテレビ。

女1 これ日本製？

女3 うん。色も変だし、音も出ないよ。

女1 古いもんは仕方ない。これ、だっぴいつのよ。二十年ぐらい前でしょ。

女3 まあね。

女1 ねむ…。もう、過労死する。昨日も帰ってきたの十二時すぎてた。もう連日タクシーです

女3 よ、もう。自転車買おうかな。

女3 自転車はしんどいでしょ。原付とかにしたら？

女1 原付か…。

女1 でも柴田さんもつと遅かったですよ。あ、知ってます？

女1 え？

女3 柴田さん課長になるらしいですよ。四月から。

女1 そうなの？すごいね。

女3 すごいっすね。

女1 へー。

女3 だからかしらないけど今月の食費四万円くれた。前まで三万円だったのに。

女1 え？そんなのもらったのあんた？

女3 ただであたしが作ってると思っちゃいました？

女1 考えたこともなかったそんなこと。てつきりあんた好きで作ってるのかと。

女3 ならではの意見だ。岡部ならではの。

女1 ふん。まあ、しょうがない。給料が違うからね。

女3 そんな問題じゃない。人を思う気持ちの問題。

女1 もちろんそれならあたしの得意分野じゃないか。

女3 あまり笑えない。あなたの話はいつも笑えない。

女1 そんなことはない。私の話は常におもしろい。

女3 それは変だな。おもしろかった記憶がない。

女1 無理をするな。お前はここのまえ私の話で笑っていた。

女3 覚えてない。あつたとしてもそれは苦笑い。

女1 それはちがう。お前はいつも私の話に大笑い。

女3 ならいますぐここで私を笑わせてほしいものだ。

女1 お安い御用さ。

女3 …。

女1 …。

女3 さあ、どうした？

女1 後悔するなよ。…むかしむかし、…ミシシッピ川に二人の少年がいた。…トムと…ヤンク
ンだ。

女3 ほうほう、で？

女1 …トムは…趣味と呼べるものを持っておらず…

台所で再びキッチンタイマーが鳴る。

女3 あ。

女1 命拾いしたな。

女3 お前こそな。

女1 いや、お前こそな。

女3 いやいや、お前こそな。

女1 いやいやいや、お前こそな。

女3 うっさい。

女3、台所へ行く。キッチンタイマー止まる。

女1 (袖に) なあなあなあ。

女3 (袖から) なんすか？

女1 (袖に) 課長の給料ってどれくらい？

女3 (袖から) 知りません。

女1 (袖に) うそつけ。

女3 (袖から) 知りません。

女1 (袖に) なんでよ。給料計算が仕事だろ、お前の。

女3 (出てきて) 下衆め、自分で聞け。
けち。

女3 (さきほどの本を読む) でも、あのひとたぶん給料そんなに変わらないと思いますよ。

女1 え、なんで？

女3 残業代つかないでしょ、課長って。下手すりや下がるぐらいじゃないですか。

女1 ああそうか。厳しいなあ、出世とは。

女3 死ぬまで働けってことですかね。かわいそうですね。

女1 ところであんた、毎日五時に帰ってなにしてるの？

女3 (考えて) …ぼやっとしてます。あ、ごはん作ってます。…そしてぼやっとして食べてます。

壁ノ花団

女1
ふーん。

女3
あれ？突っ込まないんですか？突っ込みどころ満載なのに。

女1
うん。でもあたしも最近ぼやっと仕事してるしなあ。

女3
そうなんですか。

女1
いいのかなあ人生。三十越えると人生かんがえるわ。

女3
遅いよ。

女1
あんたに言われたかないよ。あつ。

女3
なに？

女1
傘忘れた。美容院に。もう。

女3
ぼやっとしすぎなんじゃないの？

女1
どうしようかな。なんか出来たの？

女3
はい。

女1
じゃ、食ってから行こうかな。

女3
行ってから食いなさい。

女1
えー？なんでー？

女3
すぐ近くじゃないですか。

女1
だって寒い。

女3
ゆけい。

女2
(袖で)ただいま。

女3
おかえり。

女1、立ち上がり、上着を着る。女2、出てくる。

女1
おかえり。

女2
お。思いつき切りましたね。

女1
まあね。

女2
そうかあ、はやいなあ、もう猫殺しの季節か。

女1
猫殺し言うな。

女2
お風呂最後に入ってくださいよ。

女1
わかっとなるっちゆうねん。

女3
ごはんできてるよ。食べるよね。(台所に去る)

女1
おいおい、扱いちがうじゃねーの。あたしも食う。

女2
(女1に)お出かけですか？れれれのれ。

女1
ちよつとね。美容院行ってくる。

女2
さすが行動派。

女1 行動派？

女2 あれ？文句言いに行くんじゃないの？

女1 なんの？

女2 いやいや。

女1 あー。やっぱりみんな失敗だと思ってるんだ。

女2 すいません。勘違いでした。

女1 なんて勘違いするのよ。おかしいじゃないのよ。

女3 おかしくないおかしくない。

女2 そうそう。ぜんぜんおかしいわけじゃない。

女1 はつきりとした語尾でくれ。

女3 早く行ってきたらどうですか。

女1 まあいいや。とりあえず行くか。続きは帰ってからだ。

女3 いったらっしゃい。

女1、出て行く。女3、できた食べ物を並べている。女2、洗濯物に触る。

女3 乾いた？

女2 …まだ。もう捨てたら。テレビ。

女3 いやよ。だってあたしテレビもってないもん。

女2 じゃあ、あなたの部屋に持ち込んだら。

女3 寂しくない？ここじゃないと。

女2 べつに。

女2、下手に去る。女3夕飯の準備を続ける。準備し終わり椅子に座る。テレビの音声が一時的に直る。

女3 お。

テレビの音声すぐに消える。女3テレビをたたく。

女3 がんばれ。

音声でない。女3、女2を呼びに行く。

女3 ごはんできましたよ。

女3、戻ってくる。しばらくして台所に隠れるように入る。女2出てくる。卓上の料理を眺める。

女2 …。

女2、女3がさきほど読んでいた本を手にとり見る。そのあと卓上の料理群をぼんやりながめる。

女2 …これはなんだ？

女2、皿をひとつ取り上げる。

女2 …ぶり大根か。

女2、皿に入ったものを台所に向けてぶちまける。

女2 …これはなんだ？

女2、皿をひとつ取り上げる。

女2 …じゃがいも。

女2、皿に入ったものを台所に向けてぶちまける。

女2、皿をひとつ取り上げる。

女2 …鶏の肉。

女2、皿に入ったものを台所に向けてぶちまける。女3でてくる。女2、もう一皿手に取り女3に中身をぶちまける。

女2 …なにがはいってるんだよ。

女3 …。なあ、なにがはいってるんだよ。

女2 …。

女2 …なあ、これ食べたらあたしはどうなるのよ？

女2、さきほど女3が読んでいた本を取り女3に投げつける。

女2　こんなもん食べてもさあ。

女3　…。

女2　こんなもん食べてもさあ、あたしはあんたを好きになんかならないよ。

女3　…。

女2　馬鹿じゃないの、あんた。

女2、落ちている食べ物を拾い、女3の口に押し付ける。

女2　自分で食ってろ。

女3　…。

女2　自分で自分を好きになつてろ。

女3　…いや。

女2　うつつとうしいのよ、あんた。

女2下手に去る。女3散らばった食べ物の片付けをする。女1はあはあいいながら帰ってくる。

女1　速かったろう。

女3　…。

女1　なぜなら全力で走ってきたからさ。

女3　…。

女1　ん、どうしたの？

女3　…。

女1　なにかあったの？

女3　…別に。

女1　あそう。

女1、椅子に座る。女3、片付け続けている。

女1　おなか減ったんだけど。

女3　はあ…。

女1　もうないの？

女3　…。

壁ノ花団

女3、片付け終わり椅子に座る。

女1 どうしたの？

女3 別に。

女1 ふられたのか？

女3 (笑う)

女1 おなか減ったんだけど。

女3 はあ。

女1 もうないの？

女3 もうない。

女1 あそう。…じゃあ紅茶入れてよ。

女3、台所へ行く。

しばらくしてでてくる。

女1 あとどんぐらい？

女3 二分。

女1 あそう。

女3 なにもないですよ。

女1 え？

女3 ちようどなくなっただですよ。

女1 なにが。

女3 シナモン。

女1 シナモン？

女3 はい。

女1 あ、紅茶？

女3 はい。

女1 かまわないよ。

女3 はい。

女1 3、紅茶の入ったポットを見ている。

女1 大切なのは熱さだよ。

女3 はい。

テレビの音声が直る。どこか遠くの緊迫した状況を伝えている。
女13はそれに気づかない。

女1 なあ、出前とらない？

女3 え？

女1 出前。あたしお寿司希望。

女3 ああ。

女1 あんたは？

女3 じゃ、あたしも希望。

女1 オッケイ。電話帳とってくる。

女3 あ、はい。

女1、階段を上がっていく。テレビが遠くの緊迫した状況を伝えている。女3紅茶を入れる。
女1、電話帳を持って降りてくる。

おわり。

参考文献

エリカ・ジョンズ 「飛ぶのが怖い」

ウィリアム・フォークナー 「八月の光」